

ばく りゅう 麥粒

2007. Winter

麦粒/NO. 108

発行・キリスト教センター

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)

目 次

- 生かされて(天生我材必有用)…………… 木村 光伸 (2)
- 人生を変える方法…………… 大澤 史伸 (4)
- 貧しい人がもたらす平和…………… 島 しづ子 (6)
- 真の幸せへの招待…………… ギュンタ・ケルクマン (9)



「こどもクリスマス会」で絵本を読むサンタクロース

生かされて（天生我材必有用）

木村光伸

わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。

（新約聖書 ローマの信徒への手紙12章3～5節）

皆さんにとって2006年とはどんな年だったでしょうか。皆さん一人一人にとって色々なことがあった一年だったと思いますが、地球規模でみると世界の人口が65億になったという年でありました。先日、私が1984年に書いた本を読み返していたら「・・・地球の人口はとうとう48億になってしまった。これからどうなるだろう」と書いているのです。あれからたった22年で17億も増えてしまったことになりました。たくさんさんの命が地球上に存在しています。

たくさん存在しているからといって、粗末にしてよい命は絶対にありません。にもかかわらず、たとえばイラクで今日は300人が殺されたという報道があったとしても私たちはもうそれほど驚きもしないのではないのでしょうか。しかしその300人を考えてみると、一人ひとり、かけがえのない人間のはずです。それぞれにかわいい赤ちゃんとして生まれ、愛されて育ち、愛し、また憎み・・・いろいろなストーリーがある人生をその死の瞬間まで送ったはずです。でも私たちはもはやその人の人生に思いを馳せることはありません。アフリカでは毎年、100万人単位で赤ちゃんが死んでいきます。100万人といえば、名古屋市の人口の約半分ですよ。しかし私た

ちは「それは大変だ！」とは思ものそれではどうすればよいのかという具合にはなかなか考えられません。

そのように命の問題が軽く考えられる時代です。日本でも話題になっているいじめによる自殺、また殺人などがあります。様々な理由で自分で死を選ぶ人は日本で年間3万人を越えているそうです。その背景は窮屈な不安定な社会であり、時代であるということでしょう。でも私たちは300人とか、100万人とか、3万人という命ではなく、それぞれを一つ一つの命という単位で考えなくてはなりません。

◇

先日、歌手の松山千春さんがこんな話をしてくれました。

「子どもの自殺がよく話題になるけれども、そういうときに原因は？親は？校長先生は？と騒ぐばかりで、そうなる前に子ども自身に直接『おい、死ぬなよ、』と言う人がいないんだよな。『お前には天から与えられた役目があるんだから』と言ってやりたいよ」。そして、ある李白の詩を教えてくださいました。

李白は中国、唐の時代、8世紀の詩人です。今でいう四川省のずっと奥、不便なところで生まれた人で、父親のルーツなどはよく判っていません。子

どものときから天才的な才能をあらわしました。彼の才能をすれば早くから中央に打って出られたのに、社会生活があまりうまくなくて40歳になるまで酔っ払いの放浪詩人でした。40歳台でお役人になるのですが、やはり人付き合いという点でうまくいかないで、故郷に帰ります。最期は満月の夜、川に舟を浮かべて酒盛りをしていると、川面に月が映っており、その月を眺めていて、周りの人がふと気がつくとき彼の姿はなくなってしまったのです。そこで李白は月に帰ったのだと言われたのだそうです。

松山千春さんが教えてくれた詩の一節を今日の私の話のサブタイトルにしました。「天の我が才を生ずる必ず用あらん」と読みます。意味は天が私に才能を与えてくれたのだから必ず用いられる道があるはずだということです。これは李白が40歳で役人になって、間もなくしくじり、故郷に帰った後で作られた詩です。私はこの詩が一体どういう詩の一部なのか知りたくて一生懸命で探しました。題は「まさに酒を勧めんとす」というもので、この「天生我・・・」というところだけが真面目で、その前は「生きているうちが花だから皆でお酒を飲みましょう」とか、後は「金は天下のまわりもの」など、言ってみれば非常にいい加減で無責任な内容の詩であるように見えます。そのなかで先ほどの「天生我・・・」という一節は、天が才能を与えてくれた

のだからいつか用いられ、花開くことがあるに違いないと李白が信じていたからでしょう。

どんな人の人生もこの世に不必要なものはないということです。だから命というもの——自分の命も他人の命も——粗末にするのでなく天に任せて全うしなさいということでしょうか。

◇

聖書ではどう言っているのでしょうか。「私たちも数は多いがキリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」と書かれています。私たちには神によって与えられた役割があります。私たちにとってその役割が何であるか、気がつくことは難しいのですが、また気がついて、それがほんとうに与えられた役割であることを信じることは難しいのですが、それを素直に信じて、できることを精一杯やりましょう。

李白の詩よりもここでは一步踏み込んでいます。李白はまだ、天が与えてくれたから、天がいつか使ってくれるだろうと言うのですが、聖書は天が与えてくれた道に沿って、生きていきなさいと言っています。

私たちにはどんな使命が与えられているのでしょうか。それは皆さん、一人ひとりに必ず与えられています。それが何であるか、じっくり考えて見ましょう。

（きむらこうしん 人間健康学部教授 2006/12/1 チャペルアワー奨励）



人生を変える方法

大澤 史伸

一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子、イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。多くの人が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心なさい。立ちなさい。お呼びだ。」盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは「何をしたいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。そこで、イエスは言われた「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人はすぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

(新約聖書 マルコによる福音書10章46～52節)

私はこの4月にこの大学に来た新人ですから自己紹介をします。人間健康学部の大澤史伸と申します。障害者福祉を教えています。3月までは浜松の聖隷クリストファー大学に勤めていました。そこには5年いたのですが、その前は帯広大谷短大で教員をしていました。その前は東海大学で教員をしていました。その前は知的障害者施設で働いていました。

昨日、テレビで興味深い番組を見ました。ご覧になった人もいらっしゃるかな？豊川高校の数学の先生の話です。彼は中学を卒業してから大工さんとして働いていました。なぜかというところ中学の時の成績がオール1だったのです。だから行く高校がなかったのです。そしてその頃つきあっていた大学生のガールフレンドが一本のビデオを貸してくれたそうです。それは「アインシュタイン」でした。彼はそれを見て数学のおもしろさにびっくりして自分も大学に行こうと決心しました。でも中学の成績はオール1！その頃まだ掛け算の

九九ができなかったのです。そこでその時20歳になっていたのですが、小学校3年生の算数の——数学じゃない算数ですよ——問題集を買って勉強を始めたのです。そしてなんと27歳で名古屋大学に合格しました。それから大学院に進学し、今は高校の数学の先生です。20歳で九九のできなかった彼が……彼は人生をそこで変えたのです。

◇
さきほど大宮先生に読んでいただいた聖書にも自分の人生を変えた人が出てきます。バルティマイです。彼は盲人の物乞いで、要するに「お先真っ暗」という人でした。そんなバルティマイが人生を変えたというのです。どうやって人生を変えたのでしょうか。

聖書によりますと、彼は「叫んで、ダビデの子、イエスよ、私を哀れんでください」と言い始めた」というのです。彼は他にできることもないので物乞いをしていたのですが、人生を変えたいと心から願っていたのです。そこへ現

われたイエス・キリストに向かってバルティマイは思い切って精一杯の声で叫んだのです。

自分の人生を変える第一のポイントは今できることを精一杯するという事です。それはカッコ悪いことかもしれませんが。豊川高校の先生も20歳で九九の勉強をするというのはカッコいいことではありません。バルティマイはなりふり構わず叫んだのです。今できることはそれしかなかったのです。

◇
二番目のポイントにいきましょう。バルティマイが叫んだ時、周りの人々は叱りつけ黙らせようとしたというのです。すると彼はますます大きな声で叫び続けたと書いてあります。二番目のポイントは決して諦めないことです。皆さんは何かしたいと思ったとき、誰かに反対されたらどうしますか。多くの人は諦めてしまうのです。親や先生に反対されたら、しようと思っていた気持ちもしぼんでしまってシュンとしませんか。それで諦めたらおしまいなのです。

私の経験をお話しましょう。私は最初、牧場主になろうと思っていたので、大学は農学部の畜産学科に入学しました。ところが途中で気持ちが変わって社会福祉の勉強がしたくなりました。親に相談したら「お前には無理だ」。先生には「駄目」。親友には「向いてない」とことごとく否定されました。最後の砦は彼女です。彼女くらいは賛成してくれると思って言ったのですが「・・向いていないと思うわ・・」。

そこまで皆に反対されたのですが、私は転向しました。あの時、人の忠告を聞いていたら、もちろんたいしたものではないけれど、今の私はありません。彼女の言うことを聞かないでよかったと心から思います。皆さんはどうですか。将来ミュージシャンになりたい、プロ野球の選手になりたい……

どうぞ諦めないでください。バルティマイは今、自分のできることを精一杯、諦めないでやり続けたのです。そのときに彼の人生は変わったのです。

◇
三つ目のポイントです。イエスは「何をしたいのか」とバルティマイに訊ねます。彼は「先生、目が見えるようになりたいのです」と答えます。三つ目のポイントは自分にとって何が必要かを知ることです。自分のしたいことではありませんよ。しなくてはならないことです。

私は大学時代アルバイトをしていました。ハンバーガー店で働いていました。1年生の時から働いて、3年生の時にはすでに店長でした。ここではいろいろなことを学びましたが、特に笑顔です。私はいつもチャペルアワーの時はチャペルの入り口でチャペルニュースを配っています。あの時の“ステキな笑顔”はマックで学びました。ある意味で充実した学生生活？アルバイト生活？でした。それは自分のやりたいことでした。でもほんとうに私にとって必要なことではなかったのです。したいことだったのですが、しなくてはならないことではなかったのです。私に必要なこと、しなくてはならないことは社会福祉の研究だったのです。

このバルティマイはイエスから何がしたいのかと訊ねられた時、「お金が欲しい」と言うこともできたし、「誰か私を助ける人が欲しい」と言うこともできたのです。でも彼は自分に何が必要かを正確に知っていたのです。それは「目が見えるようになること」でした。

豊川高校の先生も聖書のバルティマイも自分に何が必要かを正確に知って、それを精一杯、努力して、そして諦めないで求め続けたのです。そこで自分の人生を変えることができたのです。

(おおさわしのぶ 人間健康学部講師 2006/6/9 チャペルアワー奨励)

貧しい人がもたらす平和

島 し づ 子

彼は軽蔑され、人々に見捨てられ
多くの痛みを負い、病を知っている。
彼はわたしたちに顔を隠し
わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。
彼が担ったのはわたしたちの病
彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに
わたしたちは思っていた。
神の手にかかり、打たれたから
彼は苦しんでいるのだ、と。
彼が刺し貫かれたのは
わたしたちの背きのためであり
彼が打ち砕かれたのは
わたしたちの咎のためであった。
彼の受けた懲らしめによって
わたしたちに平和があたえられ
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

(旧約聖書 イザヤ書53章3～5節)

今、社会で一番と言っているほど関心のある言葉は「いじめ」ではないでしょうか。いじめをなくすためにたくさんの人々が努力していますが、私は残念ながらこれから先もいじめはなくなるのではないかと思います。弱肉強食のこの社会でいじめをなくすということは、根本的に考え方や在り方を変えない限り無理ではないかと思うのです。

みなさんは一日の間に怒るといことはありませんか。私はよく怒ります。私は今、障害を持った人々のためのディサービスとナイトケアサービスの仕事をしています。最近の政策によってこの人たちが生活していくことがとても難しくなりました。だから社会に対して、この国の政治家に対して怒っています。クリスチャン、宗教者であると怒るといことは良いことだと言われませんが、私は私たちが怒るといことは正しいことで、それには意味があると思います。

私たちは自分の尊厳を侵されたとき、不当に扱われたとき、ないがしろにされたとき、軽蔑されたとき、必ず、怒りが湧いてきます。こんな扱いを自分は受けるべきではない、なぜ馬鹿にされなければならないのか、という怒りです。しかしそれが力を持っている人から受けたものであれば、なかなか反撃ができません。怒りはおなかの中にしまい込まれます。普段はこうしてしまい込みますが、いっぱいになってるので、きっかけがあると噴き出てきます。そして本来なら踏みにじった人に言うべきことを、さらに自分より弱い人に向けて言うてしまうという弱さをもっています。

先日、私と一緒に暮らしている障害のある仲間が私を呼びました。彼女は私のように話をすることができません。彼女は私に話があると、大きな声で叫んで傍に来て欲しいことを伝えます。行ってゆっくり「何のこと？誰のこ

と？昨日のこと？今日のこと？」と聞いて行きます。そして時間をかけて聞いて行くと、誰かが彼女に対してしたことに腹を立てているということが判りました。そこで私が「じゃあその人にそう言ってあげようか？」と言うと、その時、彼女は「もういい」と言いました。私が「あなたの気持ちを聞いただけでいいの？」と言うと、彼女は「それでいい」ということでした。もちろん言って相手が変わるなら言うてくれればいいけど、自分の気持ちを判ってくれている人がいるだけでいいという気持ちで彼女は私と話をしたのです。

今、世界的規模で弱い者いじめがあります。私たちのグループはメンバーもアシスタントもとても素晴らしい人々です。じゃあ、意地悪がないかといえれば決してそうではありません。無意識のうちにいやなことを言ってしまったりします。毎日どこかトゲトゲしたものをもっています。こんな私たちですが、今日は良い日だったなあ、平和だったなあ、という日もあります。考えてみれば、メンバーのなかで一番障害の重い人、叫んで文句を言える人はまだいいのですが、それも言えない人が私たちの不十分なお世話にも「気持ちがいい」という表情を見せてくれたとき、あるいはその場の雰囲気が楽しかったせいか声をあげて笑っているのをみたとき、私の心からトゲトゲしたものが消え去って、やさしい平和な気持ちになります。その人は強い人から順番にいじめられてもうこれ以上弱い人がいないので、どんな目にあっても反撃ができないほど弱い人なのです。その弱い人が力を持っているはずの私たちに平和を与えてくれるのです。とても不思議なことです。

先日、私は埼玉県のある教会にお話をしに行きました。お話しの後のお茶会である青年が——知的な障害も身体の障害ももっていらしたようですが——「私は毎日馬鹿にされていじめられています。でも教会でイエス様が十字架にかかったときも我慢されたのですから

皆さんも我慢するのですよと教えられたから、毎日イエス様の我慢を考えて我慢しています」とおっしゃいました。私は彼に「良い話をしてくださってありがとうございます」とお礼を言いました。その教会の人も彼のそういう思いを聞いたのは初めてだったそうです。私は彼を忘れることはできません。私なら馬鹿にされたら「悔しい」と言います。踏みにじられたら「止めてくれ」と言います。でも彼はそれが言えないまま、ただ自分の気持ちは十字架のイエス様が判ってくれるだろうと思って生きているのです。

私はなぜイエス・キリストは十字架から降りなかったのだらうと思ったことがあります。でも十字架から降りなかったから、この青年のように踏みにじられたままにいてるしかない弱い人の大きな慰めであり、大きな支えであるということを知られました。イエス・キリストは踏みにじられた人と一緒に生きていくということを十字架の上で示されたのではないかと思います。

私は小さな赤ちゃんを見るととても優しい幸せな気持ちになります。自分の中から優しさが引き出されるような気がします。そして同じようにメンバーの障害の重い人からも優しさが引き出されます。でも自分に余裕がないときはその最も弱い赤ちゃんや障害を持った人に対してさえ、いやなことを言ったり、自分のやり場のない怒りに向けてしまったりします。もっとも弱い人が優しさも引き出す代わりに私たちの中の怒りも引き出してしまうのです。だからいじめはなくなるのです。

第一次世界大戦後のドイツでの話ですが、努力して働いてもなかなかパンが手に入らない状態で、皆、怒りでいっぱいになりました。そしてその怒りはそれまで一緒に暮らしていたユダヤ人や少数民族に向けられました。そしてユダヤ人の大量虐殺が行われたのです。私たちの日本も同じような状況にあります。ほんとうに生き難い時代です。でも真に戦うべき相手、私たちが心を合わせて変えなければならぬものを見極めなければ、

愛すべき人を踏みにじったり、敵にまわしたりするという事になってしまいます。怒りを正しく行使することは私にとっても皆さんにとっても大きな問題です。

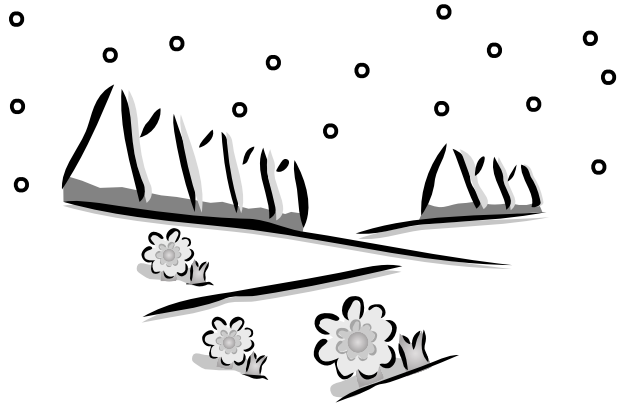
先に紹介した障害のあるメンバーが「島さんに話を聞いてもらっただけでいい」と言いました。互いに耳を傾けあうことでも助けになります。皆さんの中にある怒り、かつて踏みにじられた思いを弱い人に向けてはなりません。

もうひとつメンバーに教えられたことは私たちが困っていたとき、車椅子の上から黙って両手を合わせるようにし

て握ってくれたことです。一緒に祈りましょうというサインでした。私たちの手に余るようなことがあまりに多い時、神さまに助けをいただいで歩いていかなければなりません。それを思い出させてくれたのでした。

自分に向けられた暴力的な言葉や行動を受け止めて、他者には向けないという方法のなかに、私たちの世界が新しく生まれ変わっていく原点があるのではないかと思います。弱い人たちが自分の弱さを大切にしたいと思います。

(しましづこ 日本キリスト教団名古屋堀川伝道所牧師 2006/11/14 チャペルアワー奨励)



真の幸せへの招待

ギュンタ・ケルクマン

食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人は、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか失礼させてください』と言った。ほかの人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか失礼させてください』と言った。また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』やがて、僕が『ご主人様、仰せのとおりにいたしました。まだ席があります』と言うと、主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいしてくれ。言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。』

(新約聖書 ルカによる福音書14章15～24節)

皆さんの顔を見るとそれぞれ皆、違っていますが、誰でも顔が違うようにそれぞれ自分の考え方を持っています。またどんな宗教を持っているのでしょうか。でもどんな人間でもその人生に一番大切なもの、人生を賭けて追い求めるものは「幸せ」ではないのでしょうか。そんな話をしたいと思います。

実は私たちは真の幸せへの招待状を受けているのです。今、アンケートをして幸せになりたい人は丸を付けてくださいと言うと、たぶん全員が丸をつけるでしょう。幸せになりたいくないという人は余程の変人です。どんな考え方をもっている人でも、どんな宗教をもっている人でも、誰でも幸せへの憧れをもっているのです。

聖書はそれについてどう言っているで

しょうか。さきほど読んでいただいた聖書ではこれを宴会の場面でもらえています。人間はどの時代でもどの文化でも美味しいものを食べるということはいずれのことです。気の合った友だちと食卓を囲み、おしゃべりをして美味しいものを食べる——確かにこれこそ平和の姿だと思おうではありませんか。これこそ幸せではないかと思うのです。

◇

この聖書の場面を自分のものとするために想像してみてください。まず想像できるのは結婚式の披露宴でしょうか。私は神父ですからよく結婚式を頼まれます。そしてその披露宴にも招かれます。立派な場所で素晴らしい食事が出ます。今日のたとえ話もそうです。神さまが親切に私たちに真の幸せに招待してくれたのです。私が結婚式の披露

宴に招待されたとき、神父様に来ていただくのだからといって親切にも迎える車をよこしてくれます。そして私はまるで偉い人のように立派な車に乗せてもらって宴会場まで案内されます。聖書ではそのとき、招待された人が断わったというのです。これはたいへんなことです。その断わった三つの理由を見てみましょう。

最初の人は「畑を買ったから見に行く」というのです。ちょっと言い訳にならないと思います。畑は逃げていきませんかから明日にしてもいいではありませんか。次の人は「牛を買ったので調べに行く」というのです。これもどうして今日しなければいけないことではないでしょう。三番目の人は「結婚したばかりで・・・」というのです。だったら奥さんも一緒に行ったらいいじゃないですか。まったく下手な断わり方です。この宴会の主人は怒って、他の人々を招待します。身体の不自由な人、貧しい人を招待して大宴会の会場をいっぱいにします。

このたとえ話は何を教えているのでしょうか。いろいろな解釈があります。たとえ話というものは別の角度から見ると別の読み方ができます。その中のひとつ、救いの歴史という観点から見てください。まずはユダヤ人が選ばれた民族として神さまに招待されたのです。そしてせっかくイエスさまが来てくださって天国に招待してくださったのに断わるのです。そしてイエスさまは十字架につけられて殺されます。そして前に招待されなかったユダヤ人ではない、いわゆる異邦人、ギリシャ人やローマ人、後にドイツ人や日本人、皆が信者になるようになったという読み方です。今は聖書解釈の講義ではないのでこれくらいにしておきますが、私たちは真の幸せへの招待を受けていながら、その招待状に従わないで、言い訳をして断わってしまっているというのです。

◇

私たちは幸せになれる三つの方法を考えます。最初の人は畑を買ったと言いました。考えてみてください。財産を

得ることで幸せになれると思っている人が多いのではないですか。ここでは畑で代表されていますが、欲しいものが手に入れば、——たとえば車が欲しい、立派な家が欲しい、その望みがかなえられると幸せになれると思いませんか。

私が高等学校を卒業した時、私のオヤジが二つのことをしてくれました。ひとつは自分の銀行口座を持たせてくれました。もう一つは運転免許をとるように言われたのです。これはなるほど大人のしるしです。確かにそうです。誰でもプレゼントに何かもらおうれいではありませんか。ものを持っていることはうれしいことで、幸せな気がします。車があって、家があって、つまり財産があるということは確かに幸せへの道ですね。しかし聖書が言いたいのはこの幸せはほんの一部分であるということです。これに全部を賭けてしまうと、もし財産を失ったときどうなるでしょう。これは“全部の幸せ”“真の幸せ”ではないのです。

二番目には牛を買ったという人が出てきます。この人はどういう幸せを考えているのでしょうか。仕事です。自分の能力で成功し、自分のビジネスを増やそうとしているのです。現代で言えば、うちの会社はトラックが増えてきたとか、もうひとつ工場を作ったとか、そんなことではないでしょうか。そういうふうに考えれば私たちは幸せを自分でチェックすることができます。成功すれば幸せになるのです。大学でいっしょうけんめい勉強して良い成績をとれば幸せです。自分の仕事に成功するということは確かに幸せです。しかしこれも“全部の幸せ”“真の幸せ”ではありません。

三番目の人は「結婚したから」と言いました。私たちも結婚するということは幸せの方法のひとつだと思います。互いに愛し合うことができる人がいるということは幸せです。よい家庭を持つということは幸せです。ところが幸せな結婚ばかりではないことはお分かりでしょう。確かにそこには幸せの方法があるのです。財産、仕事、

よい家庭——

◇

しかしイエスさまはそこで「いや、ちょっと待って」と言われます。「もっと深い幸せへの道があるのですよ」と言われるのです。その方法は迎えに来てくれた人に従うということです。迎えに来てくださったのはイエスさま自身です。その意味は簡単に言えば、キリスト教の中心にあることですが、神さまが人間になったということです。言い換えれば人間がそれほど大事だということです。神さまさえも人間になったのです。ですから人間が大事なのです。まずはその人間の大切さを考えてください。

ですからキリスト教は学校を作っています。それは人間を大切にするからです。この名古屋学院大学もそうやって建てられました。

招待されたうち、誰がこの宴会で美味しいご飯が食べられるのかというと、貧しい人、目に見えない人、身体の不自由な人だったというのです。この意味は貧しい人や身体の不自由な人が幸せだと言っているではありません。私たちは皆、貧しい人で、身体が不自由な人だということです。自分の足で歩けない、他の人の助けを借りてやっと歩けるのです。ひとりの力だけでは生きていけない、大勢の人の支えがなくては生きていけないのです。私たちの目は限られています。全部のものを見ることはできません。これは目が不自由ということですよ。

(ギェンタ・ケルクマン 聖カピタニオ女子高等学校校長 2006/6/2チャペルアワー奨励)



これらをまず認めて謙遜な心になることです。謙遜になると感謝する心が生まれます。自分の幸せは自分の実力で作るというのではなくて、いただくものなのです。健康もいただいたし、才能もいただいたし、それを意識して感謝すると本当の幸せになるのです。幸せになる人は素直に神さまに感謝する人です。その感謝と喜びのあまり、また自分も他者にたいして寛大に生きることができるようになります。ですから真の幸せは謙遜、喜び、寛大さにあります。寛大さはケチの反対です。大きな心をいただきたいと思えます。

今の話を祈りにまとめたものがあります。この祈りは1550年くらいにイエズス会の創立者であるイグナチオ・デ・ロヨラ神父が祈り、残されました。原文はスペイン語で、日本語の翻訳は私がさせていただきました。祈りましょう。

◇

寛大さを求める祈り

おお、いとも愛すべき神よ、
私たちに真の寛大さを教えてください。
あなたにふさわしいものとして
使えうように導いてください。
数えずして与え、傷を恐れずして戦い、
休みを求めずして働き、
報いを期せずして自分を捧げるよう
教えてください。
ただ神のみ心を果たす喜びを知れば、
それで充分です。
アーメン